

メインシナリオ／サイド第2回
『滅びを望む者たち 第2話』個別リアクション

『君の騎士に』

台車を引いて、裏口から外へでて見回りの騎士がいないことを確認すると、ラトヴィッジ・オールウィンは裏門を開けて敷地の外へと出た。

林の中に入ってから、被せてあったシーツを取り払った。

サーナ・シフレアンは立ち上がって、不安そうにラトヴィッジを見詰める。

「俺は君の騎士になる。……生まれて初めて、俺自身の意思で、そう決めた」

瞬間、サーナの瞳から、大粒の涙がこぼれ出す。

台車から下ろすために、ラトヴィッジがサーナを引き寄せると、そのまま彼女はラトヴィッジに抱きついてきた。

それは、甘い抱擁ではなくて。ただ、ただ、苦しそうで、悲しそうで。

怖い思いをした子供が、親に必死にすがりついてきている、そんな抱擁だった。

「行く当てはあるのか？」

ラトヴィッジの静かな問いかけに、サーナは曖昧に首を振った。

「ありが……とう、もう、戻って……。あなたのせいに、ならないように、して……っ」

言葉でそう言いながらも、彼女はラトヴィッジに縋りつき続ける。

彼女を台車から下ろして、ラトヴィッジは親が幼い我が子を抱きしめるように、優しく抱きしめた。

「どこにでも、一緒に行く。傍に居る」

今はまだ、ラトヴィッジは何も聞かなかった。

こんな悲しい目をして、自分に縋ってくる彼女を、ただ守ってあげたかった。

独りの辛さはよく、知っている。

「言ったら、君の騎士になると」

そうラトヴィッジが言うと、彼の胸の中でサーナは強く頷いた。

声を上げずに、唇を噛んで彼女は泣き続ける。

「もう君は独りじゃない」

サーナを抱きかかえて、ラトヴィッジはその場を離れた。

「今の神殿長は、水の神殿が、何故、この場所にあるのか……その理由なんて、知らない。

きっと、今の領主にだって……知らされては、いない。私も……詳しくは、知らないけれど……」

ラトヴィッジと共に、獣道を歩きながらサーナはぽつぽつと語っていく。

「水の神殿の力は、私たちが生きるために……障壁を張るために、使ってはいけない。世界を、滅ぼし、自分達だけが……助かる、そんな……そんなこと……っ」

泣き出した彼女を引き寄せて、ラトヴィッジは頭を優しく撫でる。

「ゆっくりでいい。まずはどこかで落ち着こう」

「う……っ、友達が、いるの……。きっと、彼女も泣いている……私よりもずっと、苦しんでいる」

泣きながら、サーナは何かを探るかのように遠くを見回して、一方を指差した。

「あっちの方に、いる。魔力、少し、感じる……」

「それじゃ、友達のところに行こうか」

サーナが指し示す方向に、ラトヴィッジは彼女を背負って歩きはじめた。

途中、手配中の犯罪者と思われる者達と出くわすが、隠れてやり過ごし、山の中腹に差しかった時。

サーナが「あっ」と小さな声を上げた。

「どうした？」

「……何か、あったみたい。でも、大丈夫……もうすぐ、だから……自分で歩くわ」

ありがとうとお礼を言って、サーナは地に足をつくると自らの足で歩き、少しして木々の陰にいる人々を発見した。

「アーリー！」

彼女が大きな声を発すると、座り込んでいた冷たい印象の女性がこちらを見て……暗い、笑みを浮かべた。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。

ラトヴィッジ・オールウィン